

長州藩といえは奇兵隊が知られていたもので、大した身分ではないと思っただけであらう。
 瀬上主膳は大山参謀宛ての密書を取りだして世良を詰問した。これが『仙台戊辰史』によると、
 これより小島等は修蔵を主膳の宿所浅草宇一郎宅へ引致せしむ。修蔵は顔色土のごとく宇一郎子分
 らに引立てられて庭上蹲まり戦慄してやまず、曰く密書露見の上は是非に及ばず、不心得の段は深
 く謝す、希くは広大の慈悲をもって一命を救われんことを。
 これは世良の最後の醜態としてよく引用されているが、大規定之進の記録によるとつぎのとおりで
 ある。

この晩世良氏金沢屋二階より飛び下り石垣にて頭部打砕く流血面を蔽う、よって眼上を布をもって
 結ぶと雖も全躰に流血し負傷少なからず、瀬上氏以前の密書を出し世良氏を尋問す、小嶋勇記な
 らびに安広(大規定之進)も問うと雖も更に答えられず、暫くありて失謀せり、早く殺すべしとい
 う。

これは世良を取り調べた大規定之進の証言であって、世良が救命嘆願したなどとはいっていない。
 世良は俗曲「名取川」によっても分かるようにすでに死を覚悟しての東北出張であった。世良を捕えた
 ときに、白石の本陣に連行しようという話もあったが、重傷のために福島において処刑したという。
 はじめは各自軒において斬首するつもりであったが、目明しの浅草宇一郎の反対によって、近くの川
 原に変更された。各自軒は井上くらが経営していたが、母が未亡人となっていて浅草宇一郎と同棲し
 ていた。宇一郎は自分の屋敷内で殺害されることを憚って、瀬上主膳に嘆願し聞き入れられたとい
 う。世良、勝見善太郎は、各自軒から舟場町の裏の当時腰浜村字下河原に引きたてられた。処刑にあ
 たって姉齒武之進がその罪状を読みあげた。世良は、

赤禰武人、大楽源
 太郎とともに周防
 の僧月性に学んだ
 世良修蔵は、戊辰
 戦争に長州軍を率
 いて参加。会津落
 城直前に惨殺さる。
 悲劇の志士の生涯
 を史料で描く。



世良修蔵

谷林 博

た。

世良が軍監になったのは隊中きっての学者であり、奇兵隊書記の経歴によるものであろう。書記の檜崎剛十郎は、世良の隣村の久賀村の生まれであった。大野毛利氏は保守的で、檜崎、松宮相良らを攘夷戦に参加させず、彼らは文久三年（一八六三）に九州に脱走して、同年十一月に奇兵隊に入隊した。世良が檜崎を訪問したとき贈った漢詩がある。

木谷氏訪余草廬賦而贈

吾斯伯氏君鐘氏 鐘伯相逢不耐歎 聽得高山流水志 瑤琴一曲醉中彈

同じく書記の大洲鉄然は、世良とは月性の同門であった。鉄然は月性の護国仏法、海防論の影響を受けており、大島郡内の勤王僧として知られていた。同じ大島の田村深道は、三蒲村の徳正寺住職田村秀道の養子で、生国は石見国であった。室津半島を代表する小方謙九郎は、室津村の小方市右衛門の養子であった。養父は吉田松陰、月性、周布政之助らと交流した勤王家であった。山県源吾は萩の山県信七郎の子で、児玉若狭の家臣であった。彼は世良と親しかった大柴源太郎の弟であった。

三月中旬には俗論派の県令ほかを、第二奇兵隊の本陣によびよせて、責任を追求している。とくに麻郷村県令内藤佐衛兵は、小郡村県令と共謀して、山県狂介、福田良助、大田市之進、品川弥二郎らの名を使って、芥川義天を誘いだそうとした。また麻郷の勘場に僧練隊、農兵などを配置して正義派に対抗した。こうした敵対行為にたいして、謝罪させたのであった。また僧練隊の世話をしていた麻郷村光泉寺の住職は、縄でしばりあげて本陣に連行して詰問している。

第二奇兵隊では各代官所の倉庫にある兵器弾薬などをはきださせた。ついで正義派の主張を宣伝するために、僧侶では大洲鉄然、田村深道、金山仏乘、神官では潮見清鞆、西村楯間、佐藤田連などを

巡回させている。これらのよびかけに応じて、この頃の隊員は四百名にもなったということである。

第二奇兵隊は当時繁栄していた室積港を中心として結成されたが、隊員が増えて訓練するにはなにかと支障があった。そのために熊毛郡塩田村の石城山に本陣を移すことになった。この山からは晴れた日には、周防灘をへだてて四国、九州を望むこともできる。石城山を本陣とすることについては、すでに一年前に秋良敦之助が調査に登ったことがあった。それは吉川経幹が幕府との調停役をかって志士たちから不信の目でみられていただけに、ここに本陣をおいて岩国領に勢力を示す必要があった。いよいよ転陣することになって、総督の白井小助、書記の小方謙九郎が登山した。石城山は山の頂上近く巨石でとりまいてる山城で、古代に大陸からの侵攻にそなえて、神籠石（史跡）という石の城壁を築いていた。いまも鬱蒼とした木が繁って、原始林のような山である。

慶応元年（一八六五）三月三日に、いよいよ室積村の普賢寺から転陣することになった。隊員三百名は純白の上着に、当時流行していた紫色のゴロフカの袴をはき、朱鞘の刀をさして行進した。世良などの幹部は、馬に乗って指揮をとりながら石城山をめざした。室積村を出て二五堂という山を越えて、川のそばの鮎返りをでて、三輪村から塩田村を通って石城山に登った。道のところどころに番所をおき、高札をたてて不法な入山を禁じた。頂上にある神護寺を本陣として、第一、第二、第三の兵舎、馬小屋、医療室などの施設をつくり、練兵場を拡げて訓練にあたることになった。追討軍から郷土を防衛してくれるということで、近くの村々からの祝儀見舞などで賑わったという。

青年のなかから志願をして入った奇兵隊士だけに、そのころ若い女性たちにとってあこがれの的であった。十五、六歳の娘が室積、柳井などから、三百五十メートルもある山道を分けながら真夜中に恋人を訪ねたということである。隊員たちは百姓では刀を差すことはできなかったが、入隊すると腰

世良修蔵の青春	隊軍監となる／光明寺事件 ／赤根事件に連座／世良氏 を名乗る／第二奇兵隊の脱 隊／大島口の戦い／大島郡 を奪回／征長軍の敗退／三 ／僧月性に学ぶ／益田氏の 家臣となる／諸師につく／ 浦氏と克巳堂／梅田雲浜、 阿月を訪う／息軒の「三計 塾」塾長となる／師月性の 死／藤森天山に学ぶ／加藤 有隣を招く使者となる／木 谷家の養子となる	台藩の内通／会津討入り／ 仙台藩の降伏使／総督府の 内情／会津・庄内同盟成る ／関宿の会談／仙台藩の進 撃／国境の紛争／会津藩の 嘆願／奥羽同盟の結成／会 津嘆願書を却下
奇兵隊参加	奇兵隊の結成／帰国／奇兵 隊書記となる／世良の郷党 教育／京都蛤御門の変／馬 関の攘夷戦／三家老の自刃 ／高杉晋作の挙兵／周南志 士たちの決起	世良修蔵暗殺 世良狙わる／醍醐・世良参 謀の動き／暗殺の密議／世 良惨殺さる／月心寺跡に葬 る／薩長藩士等殺害さる／ 奥羽列藩同盟の崩壊／会津 ・庄内藩の降伏／東北諸藩 主の処分／但木土佐らの処 刑／瀬上主膳らの釈放／金 沢屋と世良／削りとられた 墓碑銘／妻千恵の末路／世 良の遺族／詩歌と横笛／故 郷における世良の顕彰／あ とがき
第二奇兵隊結成	南奇兵隊の結成／第二奇兵	会津の世良修蔵 世良の福島入り／会津・仙 とがき

世良修蔵の青春

中司家に生まる

戊辰戦争において、世良修蔵ほど憎まれた者はいないといってもよい。この戦いは薩長が奥羽諸藩を武力鎮圧するために鎮撫使を派遣した。その手先として強硬分子の参謀大山格之助、世良修蔵が選ばれたという。世良に対する怨みは、殺されたとき、その屍に竹を突き刺してローソクをたてて酒宴をしたと、故郷の山口県大島に伝えられた。

また世良がよく東北の文化を五十年も遅らせたという。立身出世といえれば大臣、大将となること最終目標とされていたが、朝敵とされた諸藩から多くでていない。その反動として世良のせいのように思われて、槍玉にあげられたものであろう。

とくに世良の伝記が明らかにされていないために、彼は賤しい島の漁師のせがれで、成り上がりの官軍参謀といわれている。あまりにもゆがめられた世良の伝記を明らかにして、戊辰戦争において果たした彼の役割について述べてみたい。

世良が生まれた山口県大島郡は、一郡で島となっており、瀬戸内海では淡路島、小豆島につぐ島である。大島の名は古事記、日本書紀などにも見えて、またの名を大多麻流別ともいった。面積は一、三九六平方メートルで、人口は七万人を超えたこともあったが、いまでは出稼ぎの過疎の島となっている。

■本書は新人物往来社の「伝記シリーズ」で昭和四十九年に刊行されました。今回の復刻に際しては、B6判の原本をA5判に拡大して、格調高く、しかも読みやすい本に仕上げます。

■上記「目次」の通り、非常に内容充実した、唯一の「世良修蔵伝」であると同時に、「第二奇兵隊」や「四境の戦 大島口」など、これまであまり省みられなかった周防部における維新史解明の手がかりとしても、ぜひお勧めしたい本です。

■著者は大正十三年柳井市生れ。名館長として十八年も在任された市立柳井図書館長を定年退職の翌昭和五十七年急逝されました。実直な学者で、郷土史家としては「柳井市史」編纂委員長などを務め、著書には「青年時代の国木田独歩」「児玉花外その詩と人生」ほかもあります。

- 体裁 A5判二五二頁 上製貼箱入
- 定価 五千円(税込送料380円)
- 特価 四千円()
- 特価締切 平成十三年十一月三十日
- ▼三点セット特価もあります
- ▼直販につき書店卸不可

徳山市銀座二の二三
☎〇八三四 〇二九五 マツノ書店



『世良修蔵』の執筆を終えて

元柳井市立柳井図書館長 谷林 博

山口県における明治維新の志士として二つの系統があつた。長門萩の吉田松陰と、周防遠崎村の僧月性の門流である。松陰には久坂、高杉、山県、伊藤などと有名になつた者が多い。その点月性門では、赤瀬、世良、大楽などと、いずれも非業な最後をとげている。このほか周防部には富永有隣、白井小助などもいたが、いずれも郷里において不遇な一生を送つた。その原因として、毛利氏の直臣でなく陪臣であつたことや、本藩萩が政治の指導権をとつたことなどがあげられよう。

世良は月性門で重きをなしていたが「戊辰戦争のとき東北で暗殺された」というだけで、その業績は県内でもあまり知られていない。それどころか小説、演劇などでは悪役にされている。実直で学者タイプの彼は、東北においては、ひどくゆがめられた人物となつていのである。世良としては戊辰戦争が出番であつただけに、東北には史料が多いが、その前半についてはこれまでほとんど不明であつた。

私が本書の執筆に五年の年月を要したのも、史料の採訪に手間どつたからであつた。幸い私は世良の郷里の大島とは近く、彼が随臣した浦家は柳井市内にあつて地縁に恵まれていた。

私は昭和四十七年に世良の遺跡を求めて仙台、福島、白石などを訪問した。その地において但木土佐、玉虫左大夫、三好監物など、それぞれ名家のために殉じた人物たちを知ることができた。

東北は桜の満開の季節であつた。はるばると白石市の陣馬山にある世良の墓を訪ねた。桜の花の下にあつた世良主従の墓の字は所々を削り取られており、私は一世紀を経てその憎しみの深さを知つた。

私はついで白石城主の末裔、片倉信光氏を訪問した。氏は官賊の名のもとに別れて戦い、その中心人物として、個人的に世良は気の毒な人であると言われた。これは予期せぬ言葉であつて、深い感銘を覚えた。

私はつとめて、第三者の冷静な目をもって世良を描き出そうとしたが、果たしてそうはゆかなかつた、これもやはり同郷意識がもたらしたものであろう。

それはともかくとして、山口県人の世良知らず、東北人の世良識らずには、幾分か応えたつもりでいる。

(本書「あとがき」「著者のことば」より抜粋)

世良修蔵のこと

▼世良は天保六年、大島郡椋野村 中司八郎衛門の三男として生まれた。(後に世良姓を名乗る)大島村で海防僧月性の時習館に学び、江戸では儒者安井息軒の三計塾塾長をつとめ、文久三年頃から高杉晋作と交わり、奇兵隊書記となつて活躍した。

▼第二奇兵隊が結成され石城山に駐屯したとき、世良は軍監となつた。そして慶応二年六月、幕府の第二次長州征伐に際して奥羽鎮撫総督府の参謀となり、仙台より福島に入った。

▼奥羽諸藩から会津藩主松平容保の嘆願書が提

出されたが、世良はこれを拒否し仙台藩主に恨まれ、明治元年閏四月二十日福島島の宿舎において捕えられ下河原で斬首、ときに三十四歳であつた。

▼白虎隊が神話化されている会津若松地方では、世良は今もなお「大悪人」とされている。しかし新史料と実地踏査による奥羽の遺族などからの聞き取りによってその生涯を洗い出した本書を読めば、その死は、明治政府誕生のための「捨石」として「火中の栗を拾わされた」に過ぎなかつたことがよく分かる。